日本語とアイヌ語の関係

――マタギという言葉の存在について――

知里真志保

青空文庫

日本民族がその成立において複合民族であるように、その言語もかなり複雑な要素から成った混合語である。いまそのうちのアイヌ語からきた要素についてみると、そこにはエゾ、エミシ、アイヌなど種族を表わす名称をはじめ、北方特産の動植物や製品の名称、特殊の風俗習慣を示す言葉、山間の特殊の地形を表わす言葉などに、アイヌ語に由来した語がかなり多く見いだされる。日本本土の東北地方にきわめて多くのアイヌ語の地名が残されていることも周知のことであって、古くこの地方にアイヌが住んでいたことを推測させる有力な手がかりの一つになっている。ことに私どもの注意をいちじるしく引くことは、この地方でマタギと呼ばれる狩人の山言葉の中に、まぎれもないアイヌ語がそれと意識されずに生きて用いられているという驚くべき事実である。

このマタギのアイヌ語は奥羽地方のほかに新潟県の一部にまで分布しており、そこでは犬のことをセタ、シェダ、セッタ、ヘダといい、所によっては里言葉で犬の肉のことをそういうが、これはアイヌ語で犬を表わすセタ、シェタと同じである（アイヌ語はサ行音とシャ行音は同じである。また清音も濁音も同じである）。人間や熊の頭のことをハケ、ハッケ、ハッケイ、ハッキなどといい、手ぬぐいのことを頭に巻く物の意味でハッケカラマキなどと呼ぶが、これはアイヌ語のパケ（頭）からきたものにちがいない（アイヌ語のパ行音は日本語ではハ行音になる）。心臓をサンベというが、それもアイヌ語と同じ形である。水をワカ、ワッカというが、単に水だけでなく、雨水、小便、涙、湯、酒などまでも広くいい、雨をアマワッカ、カラカサをワッカプタ（水蓋）、濁酒をメグリワッカ、清酒をキヨワッカ、小便をウジワッカ（内水、体内から出る水）、魚をワッカムグリ（水を潜る者）という。海をホロワッカ、洪水をワッカホロというが、このホロは『大きい』『多い』の意味で、アイヌ語のポロに当たる。

雪が多いことをワシホロというが、ワシはアイヌ語のウパシ（雪）からきたものらしく、ウパシ→ウシ→ウワシ→ワシと変化したらしい。里言葉でも雪をワシという所があり、なだれることを『ワシあシゴク』などという。木または木の箸のことをツグリ、ツグイというが、アイヌ語のチクニ（木）のなまりである。火がはねることを『ハッピがホゲル』というが、ハッピはアイヌ語のアペ（火）のなまりらしい。日や月をトッピというが、アイヌ語の北部方言トンピ（日月）のなまりであろう。天気のことをカド（カンド）というが、アイヌ語のカンドは天の意味である。皮ひもをトナリと呼ぶが、アイヌ語でもトナリあるいはトラリである。荷負縄をシナリ、帯をオビシナリと呼ぶが、アイヌ語のシナ（結ぶ、しばる）に関係がありそうだ。爺をホロケというが、樺太アイヌ語のホロケポ（若い男）と関係があるかも知れない。ポは若いを意味する指子辞だから。

いったい、このマタギの山言葉にアイヌ語の北部方言の色彩が見いだされるのは注目すべきことである。またその分布の範囲が現在の東北地方の方言でもとくに岩手・青森・秋田・山形などいわゆる北奥方言の地帯に一致し、宮城・福島などにまったく行われていないらしいことは、これまた注目に価する事実である。

さて、民族の接触にはかならず文化の交流が伴うものである。その意味で、日本語の中にアイヌ語の要素を見いだすことになんのふしぎもないわけである。ただ将来、日本語とアイヌ語の関係を考え

る場合、文化というものは水の流れと同じく、高きより低きにつく、という原則に固執しすぎたきらいがあった。文化というものを、その風土に適応して発達した生活様式と考えるならば、ある時代のある地方では先住民族のもつ生活様式の方が、新来民族のそれよりも有能で有力だったはずである。

古く東北地方に進出してきた日本人は、その当初においては、先住民族であるアイヌの生活様式を多量に採用しなければならなかったであろう。もちろん、それは後になってしだいに廃棄されていったにちがいないけれども、この地方のようにアイヌの血が比較的優勢であった特殊の地域においては、ことにまた狩猟のような信仰のからまる特殊の世界においては、古い時代の慣習と言語が、比較的後代にまで保存されていたとみていいはずである。マタギのアイヌ語は、すくなくともそれを言語のうえで証明するものだと思う。

近ごろエゾ非アイヌ説が流行し、古代のエゾはアイヌではなく、日本民族と人種を同じくする辺民にすぎぬとなし、東北地方の地名などもアイヌ語で解けるものは日本語でだって解いて解けぬことはない、などと強弁する学者まで出て来たようだが、その人々はマタギの山言葉の中にあるアイヌ語を、どのように説明づけるのであろうか。

〈『北海道新聞』昭和36年2月3日朝刊〉

青空文庫情報

底本：「和人は舟を食う」北海道出版企画センター
2000（平成12）年6月9日発行
初出：「北海道新聞」
1961（昭和36）年2月3日朝刊
※底本は横組みです。
入力：川山隆
校正：雪森
2015年5月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本語とアイヌ語の関係
――マタギという言葉の存在について――

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　知里真志保
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/